

第27期考古学セミナー（2025年度）

—日向洞窟遺跡西地区と縄文時代草創期の置賜—

第2回講座

講義③

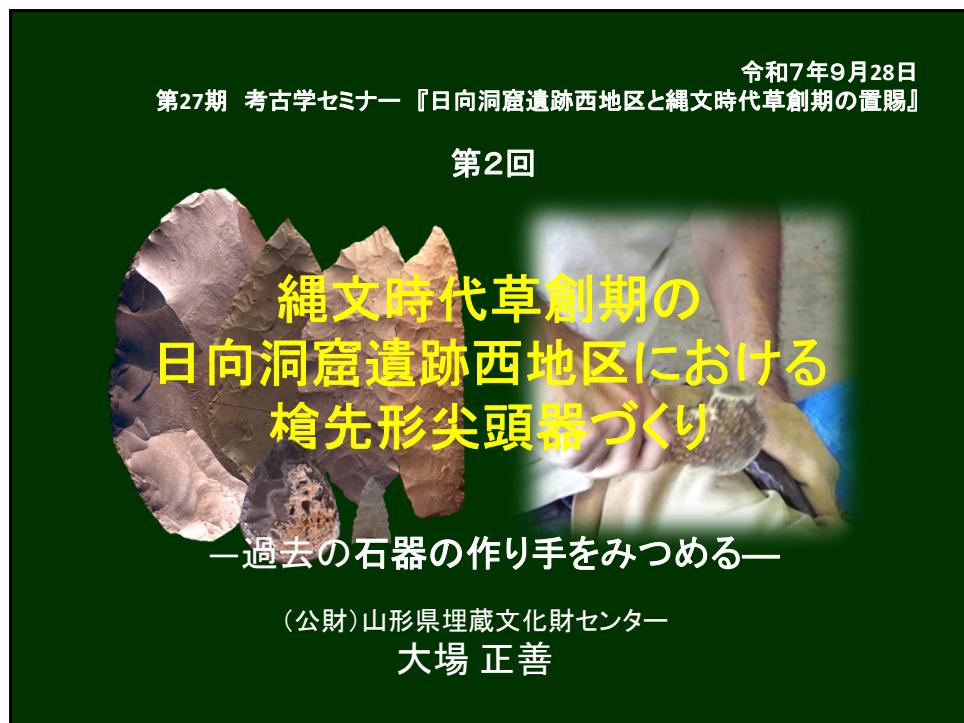
日向洞窟遺跡西地区出土の貞岩製槍先形
尖頭器における技術学的検討

(公財)山形県埋蔵文化財センター

大場 正善 氏

令和7年9月28日（日）

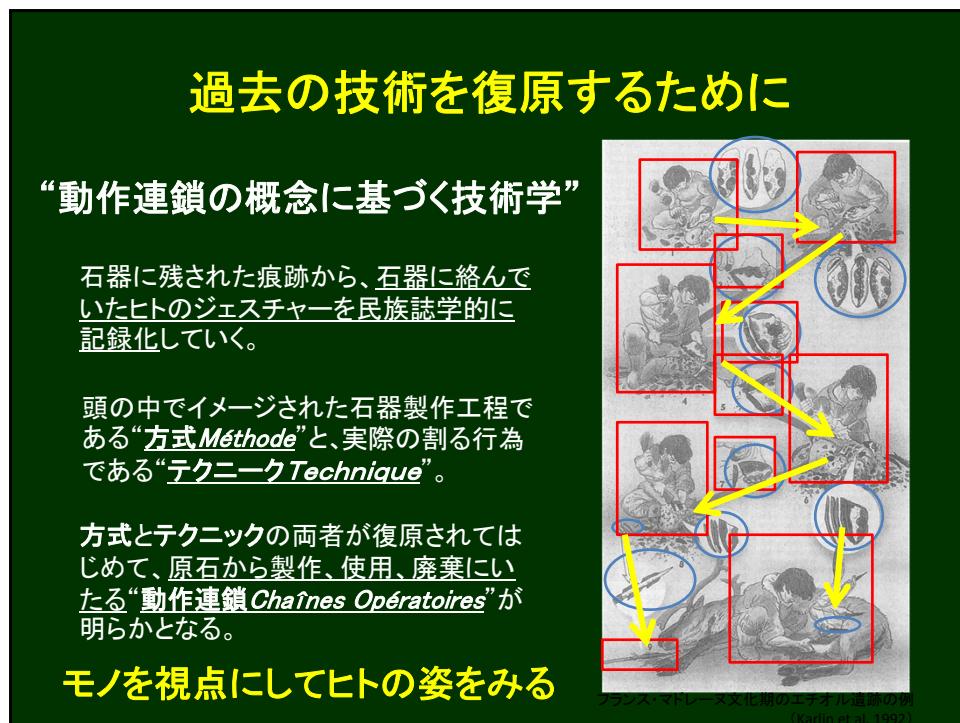
会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室



1



2



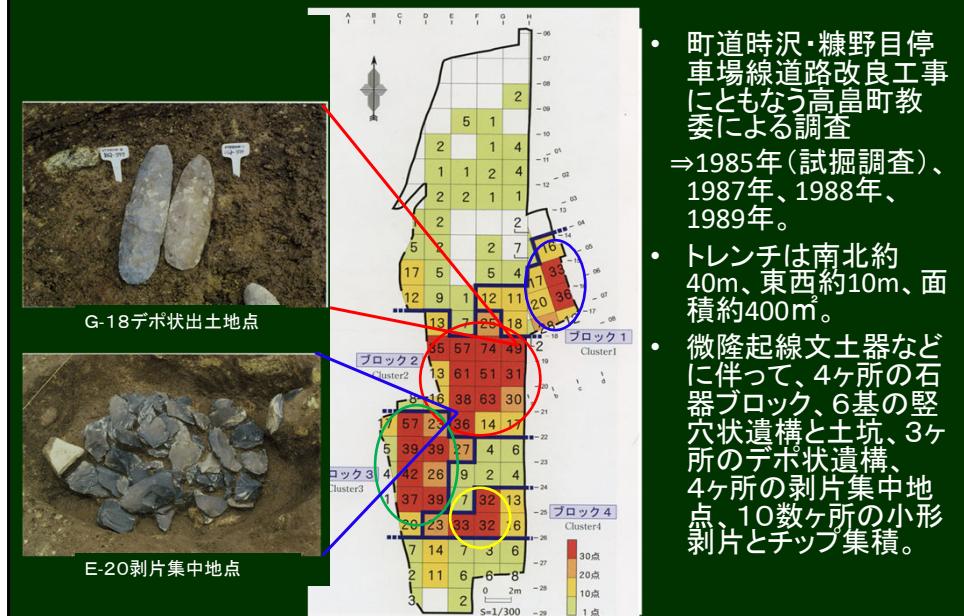
3



4

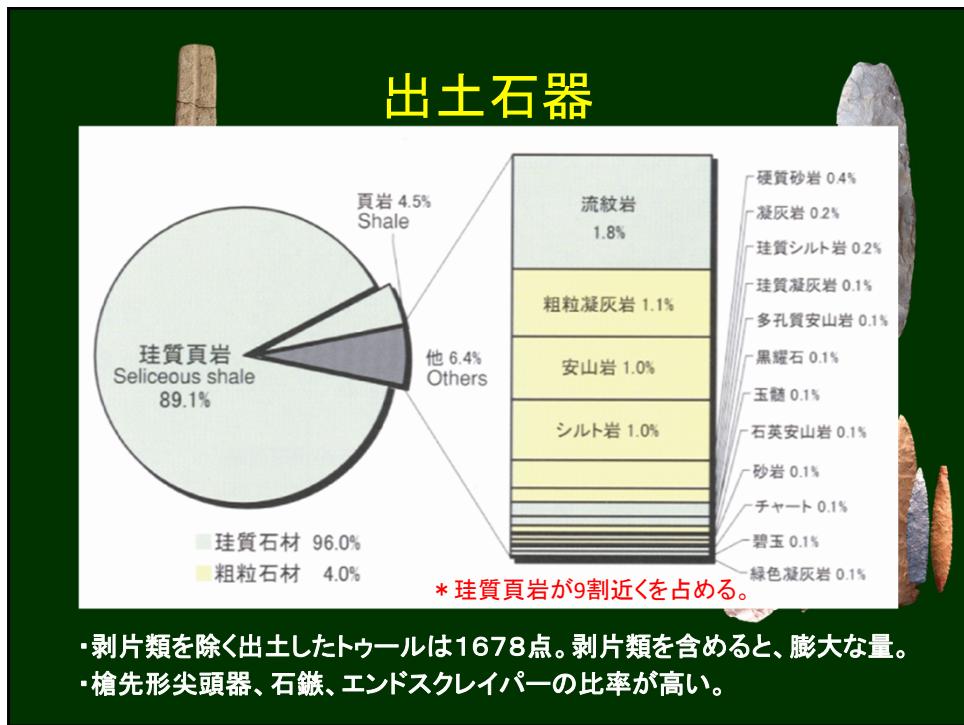
2

調査経緯

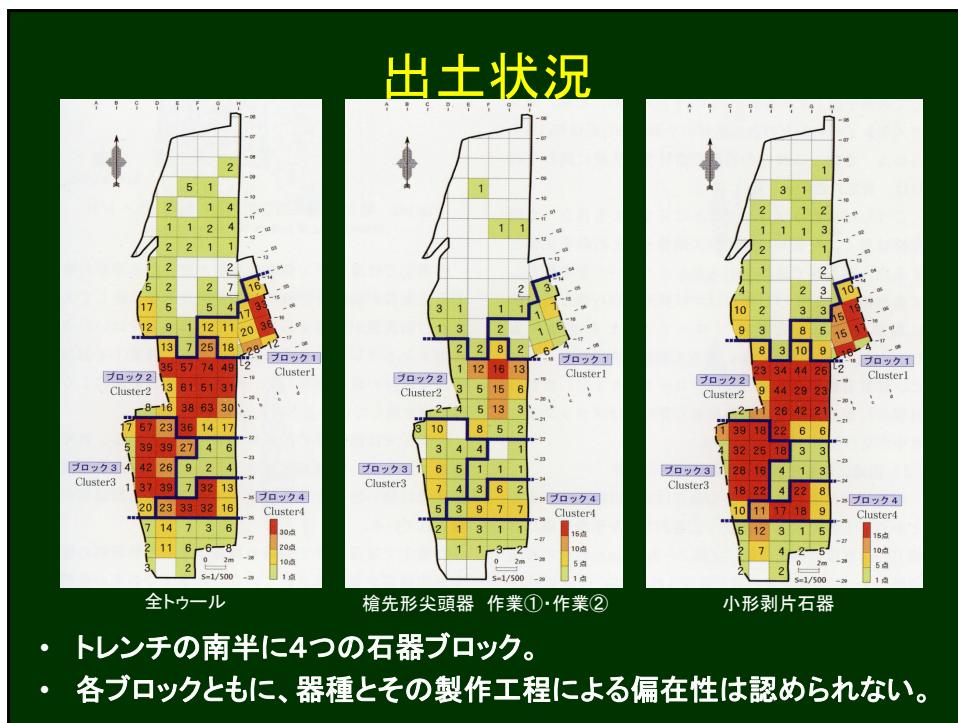


5

出土石器



6



7



8

槍先形尖頭器の素材

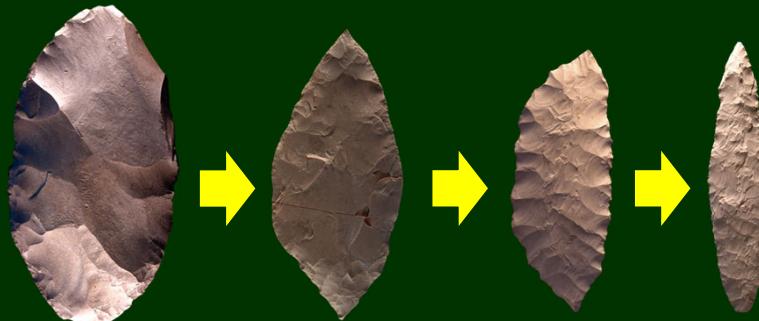


- 尖頭器未製品に大きなポジティブ面が残存。
- 長:10~20cm程度、幅:5~10cm程度、厚:3~4cm程度の大形剥片。
- 径20cm程度の硬質石製ハンマーによる直接打撃。
- 石核がない、自然面の残存率が低い。
- 石材採集地などにおいて、素材の割り出しと、一定程度荒割りを行う。

9

西地区における槍先形尖頭器製作のメトード

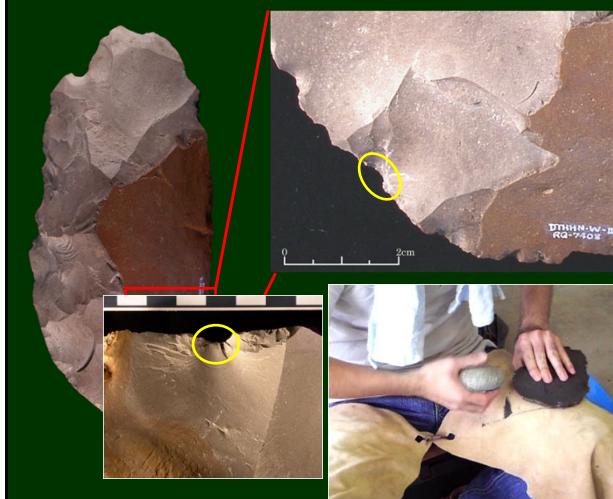
作業① 作業② 作業③ 作業④



- “石器製作址”的性格から、製作途上、すなわち“未製品”的槍先形尖頭器が多く残されている。
- 未製品を初期工程から完成形に近い順に並べることで、槍先形尖頭器製作のメトードが復原可能。

10

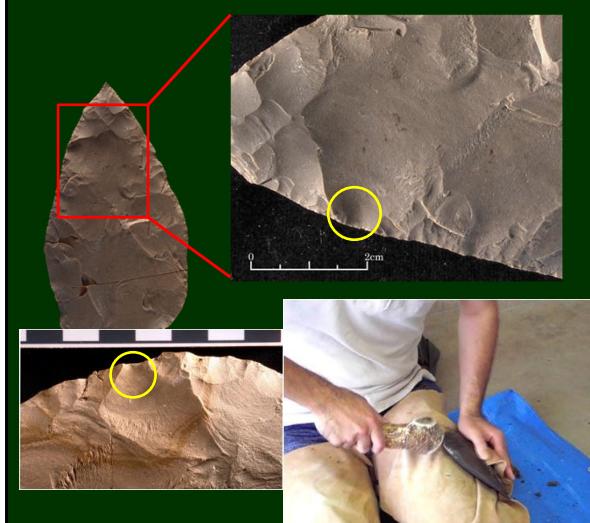
テクニークの復原—作業①—



- 明瞭な打点、発達したバルブ、深めの剥離面。
- 硬質石製ハンマーによる直接打撃。
- 厚手の剥片を剥離して、重量感のある両面体を製作。

11

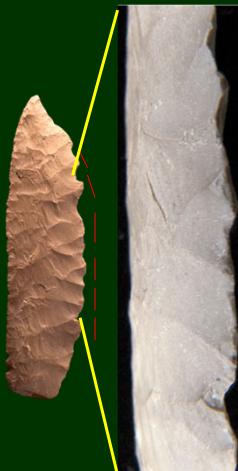
—作業②—



- 明瞭な弧を描くリップ状の剥離開始部、拡散したバルブ、剥離面全体の平坦さ。
- 鹿角製ハンマーによる直接打撃。
- ポイントフレークを剥離して、面的に加工。作業①に比べて、縁辺が整えられ、木葉形に仕上げられる。

12

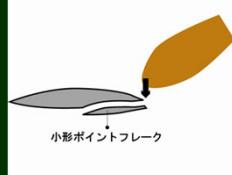
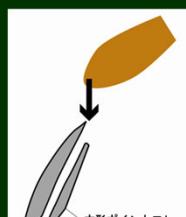
前面角の調整



- ・ 前面角(打面と作業面のなす角度)の打面側にステップを起こした微細剥離痕の集積と縁辺の摩滅。
- ・ 軟質石製ハンマー(あるいは砥石)による擦り。
- ・ 打撃時の縁辺の碎けを防ぐ。
- ・ ハンマーの損傷を少なくする。

13

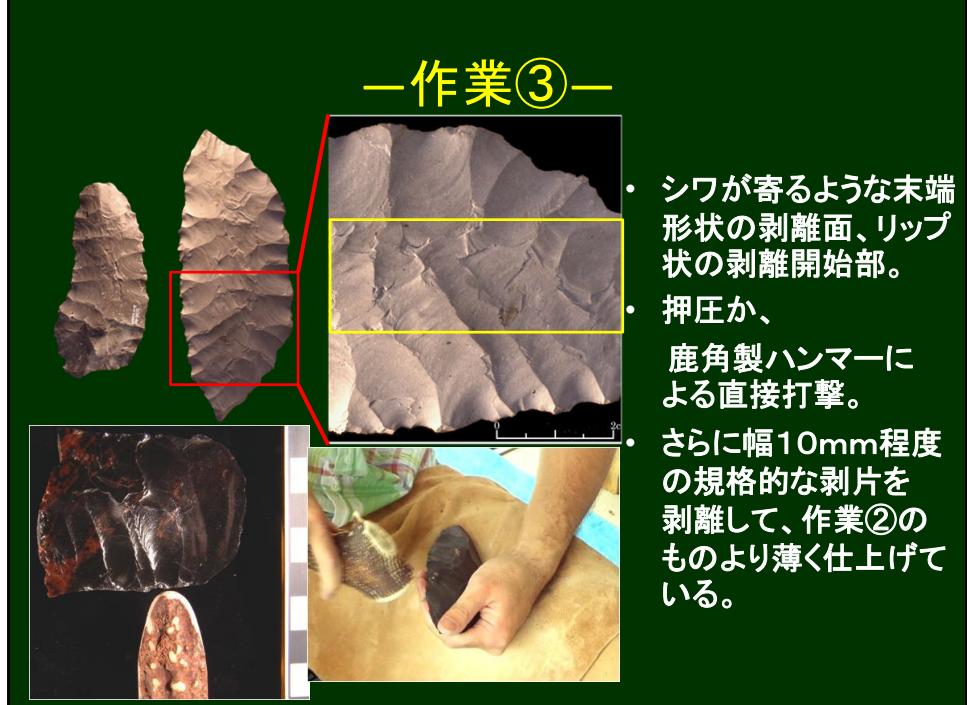
2種類のポイントフレーク剥離



- ・ 器軸を越えるくらいの大形ポイントフレーク。
- ・ 器軸を越えないくらいの小形ポイントフレーク。

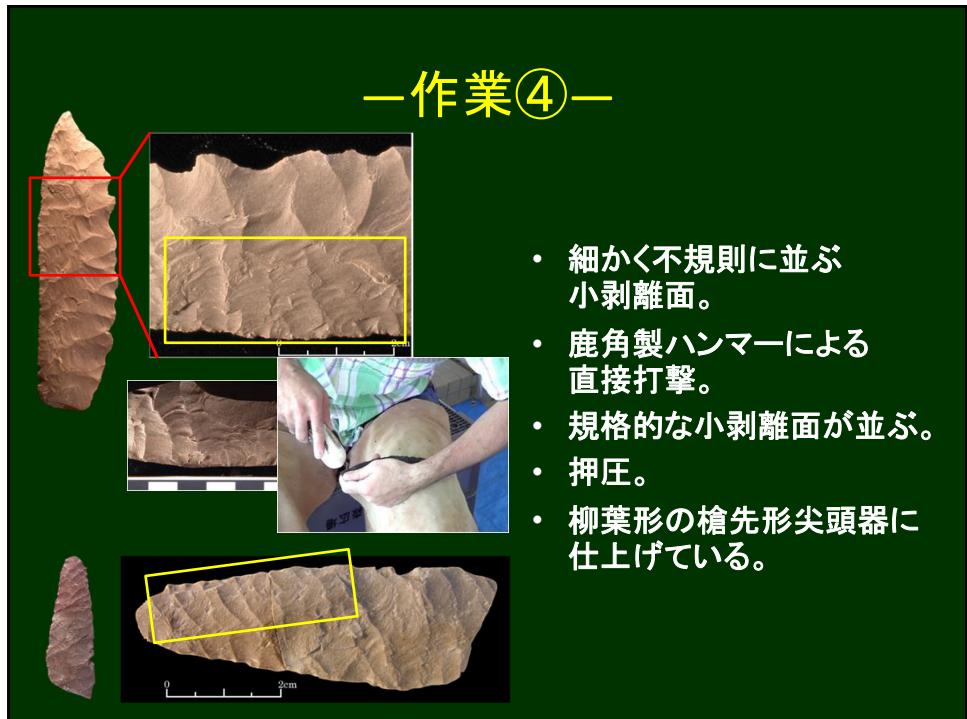
14

一作業③一



15

一作業④一



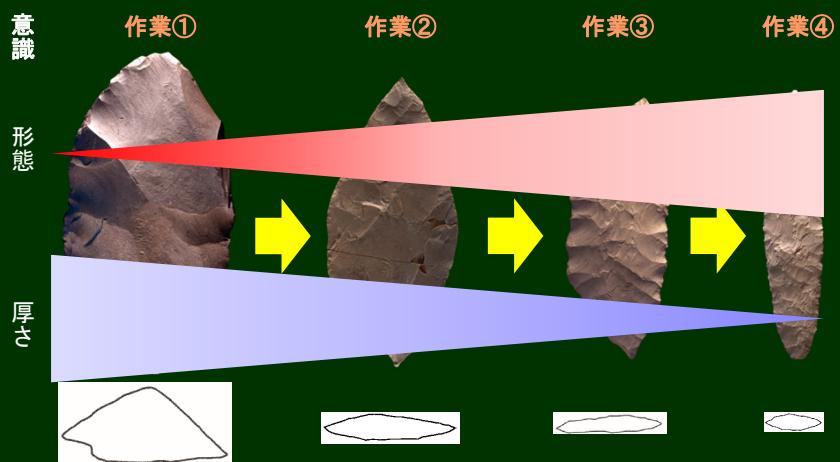
16

IV 西地区における槍先形尖頭器製作の動作連鎖



17

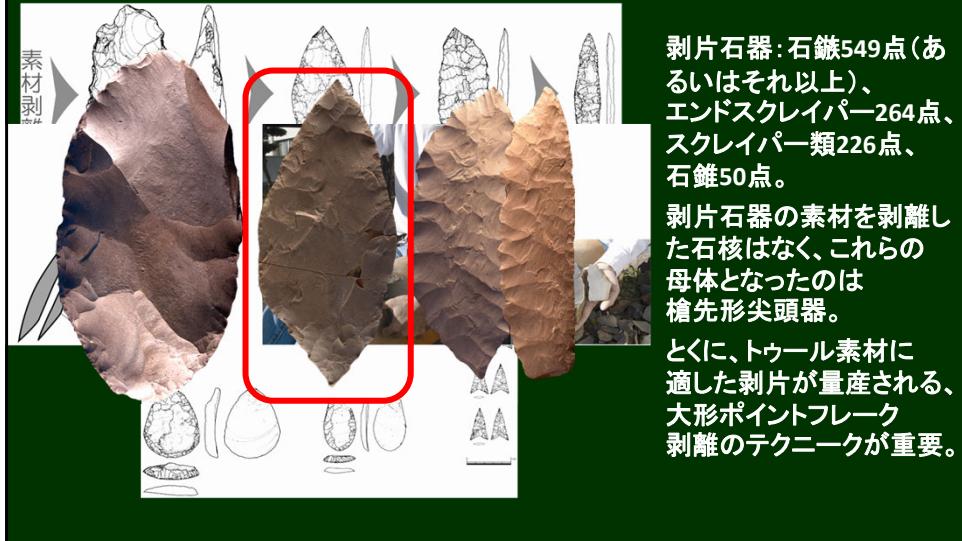
製作時の意識



- ・ 作業①84点、作業②260点、作業③44点、作業④37点。
- ・ 作業②が最も多いのは、コントロールが難しい工程であったため。

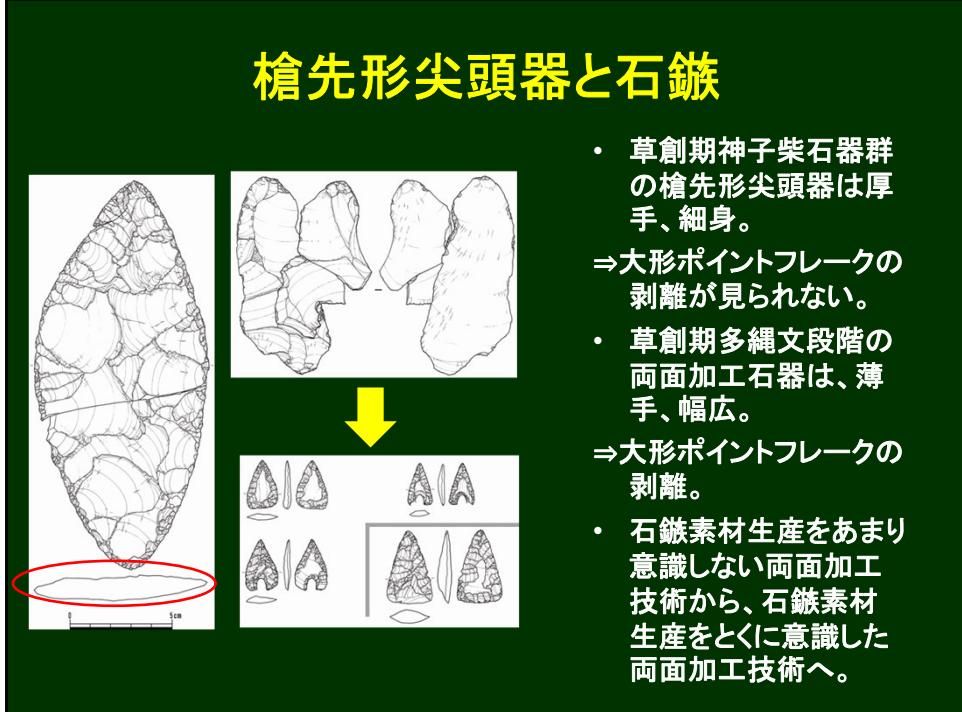
18

槍先形尖頭器とトゥール



19

槍先形尖頭器と石鏃



20

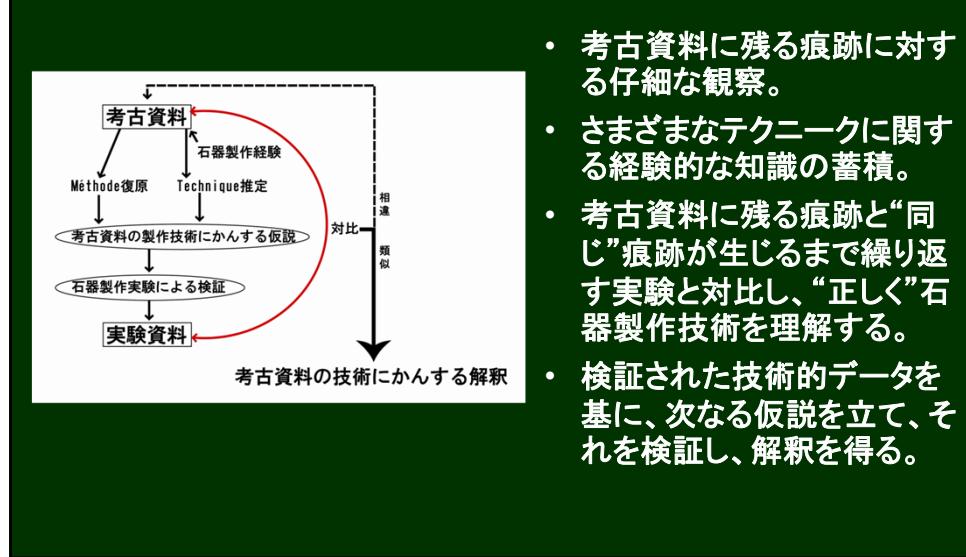
V 石器作りのイメージ



- 類似した“石器を作るヒト”的なイラスト⇒ある1つのモデルを基にして描かれている。
- 撮影された(?)テクニークは、実際には合理的なテクニークでない⇒特殊な作業をしているか、粗雑な石器を製作している場面？

21

より実態に近い過去像を復原するために



- 考古資料に残る痕跡に対する仔細な観察。
- さまざまなテクニークに関する経験的な知識の蓄積。
- 考古資料に残る痕跡と“同じ”痕跡が生じるまで繰り返す実験と対比し、“正しく”石器製作技術を理解する。
- 検証された技術的データを基に、次なる仮説を立て、それを検証し、解釈を得る。

22



槍先形尖頭器製作で使用している道具一式

多謝！